

## シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

### 第3回

#### 第二部

‘慰安婦’から「꽃할머니/コッハルモニー花のおばあさん」へ

～絵本で社会を語るということ

(要旨)

平成 23 年 1 月 22 日

講師：クォン・ユンドク

#### はじめに

---

＜コッハルモニー花のおばあさん＞の講演依頼を受けて大変驚きました。＜花のおばあさん＞の講演会を行うのは勇気の要ることだと思ったからです。お招きくださった日本ペンクラブと出版社、日本の作家の方々に心から感謝申し上げます。

＜花のおばあさん＞の主人公、シム・ダリョンおばあさんは、幼くして「日本軍慰安婦」として連れ去られました。韓国で＜花のおばあさん＞の絵本が出版された後、2010年6月に、シム・ダリョンおばあさんに絵本を捧げる献本式がありました。シム・ダリョンおばあさんは2010年の秋に体調を崩し、12月初めにお亡くなりになりました。

#### 1. 日・中・韓平和絵本

---

2006年春、日本の4人の絵本作家（田畑精一さん、和歌山静子さん、浜田桂子さん、田島征三さん）が、日・中・韓平和絵本プロジェクトを提案してきました。2007年に中国の南京で日中韓3国の作家が初めて一つの場に集まったときには、総勢27人ほどになりました。作家が一人ずつ、自分が取り組みたいテーマを発表しました。私はこのとき「日本軍慰安婦」の物語にすると言いました。多くの方々が私の手をぎゅっと握り、激励してくれました。

本を作る間、3国の作家と編集者が何回も集まって意見を提起し、討論し、争点を整理し、解決する過程を経ました。もちろんEメールでも意見を交わしました。このような過程の中で、韓国と日本の作家、出版社の間の信頼が厚くなりました。＜花のおばあさん＞はそうようにして作られた絵本です。

#### 2. 事件の告発と憎悪心

---

作品構想のために、‘慰安婦’だったおばあさんたちの証言集を読み、おばあさんたちが治療プログラムのなかで描いた画集などを見ました。私は性暴行に対する怨恨と憎悪心で一

杯になり、気味の悪い絵を描き続けました。ダミーを人々に見せて意見を聞くと、こんなぞっとするような絵本を誰が見るのかと言われました。読者とコミュニケーションするためには、他の方法を探さなければなりませんでした。

怨恨と憎しみに打ち勝つまでに長い時間がかかりました。私は「日本軍慰安婦」として連れて行かれた他のおばあさんの写真を見て、この絵本はこの写真のように、悲しいながらも同時に美しい絵本でなくてはならないと考えました。その写真からインスピレーションを受け、〈花のおばあさん〉の最後の、頭に花冠をかぶった姿を描きました。

### 3. 〈コッハルモニー花のおばあさん〉のテーマ

「植民地時代の歴史的な事件を現在に呼び起こす理由は何だろうか」、「‘慰安婦’のおばあさんたちは、証言を通じて何を言いたいのだろうか」、「‘慰安婦’問題を単純な性暴力の次元を越えて、どのようにして戦争と平和の問題に結び付けることができるだろうか」。これは絵本のスケッチをするときに、始終思い悩んだ問いでした。

性暴行に関する事実そのままの表現は、ポルノの類と変わりません。読者たちにかえって性的な興味をかき立てることもあります。私が‘慰安婦’のおばあさんの話を絵本に描くと言ったとき、多くの人々がこの点を憂慮しました。

テーマの設定は、‘慰安婦’問題の本質をどのように理解するかということと関連があります。‘慰安婦’の問題は、一部の質の悪い軍人が、罪のない女性個人を性暴行した事件ではありません。戦争という非人間的な状況の中、帝国主義国家と軍隊の主導又は黙認の下で、弱者である植民地の女性を制度的に性暴行した事件です。

### 4. 跳び越えなければならない課題—盲目的民族主義

1991年、キム・ハクスンおばあさんが初めて人々の前に出てきて証言をしました。‘慰安婦’おばあさんたちの証言を聞いてみると、日本政府に対する怒りもあるけれども韓国政府に対する怒りも大きかったです。彼女たちは戦争が終わってから50年の歳月を社会の無関心と冷遇の中で生きてきました。戦争がなくなる限り、戦時下の女性の人権問題はいつまでもどこでも存在しうるのです。絵本であえて日本を強調する必要はないと考えました。最後に、ベトナム女性やイラク女性の姿も描き入れました。

### 5. 大人たちの反省、子どもたちが持っている希望

2010年2月、仮製本の絵本を日本に持って来て、日本の子どもたちの意見を聞きました。子どもたちは「おばあさんの誤りでもないのにこんな目に遭ったということに心が痛む」、「戦争を経験した方が亡くなるとこのような事実が分からなくなるから、本を出版して人々にたくさん知らせなければならない」、「日本がこういうことをしたのは衝撃的だが、今まで知らされなかったということももっと大きな衝撃だ」などと意見を述べました。

絵本が出版された後、韓国の小学校高学年の教室で読み聞かせの会を開き、子どもたちの感想を聞きました。日本の子どもたちと似た意見が出ましたが、何かくやしくて怒りがこみ

上げてくる、日本は悪い、という意見も出てきました。

韓国の子どもたちに、日本の子どもたちにモニタリングしたときの写真を見せながら、「日本の子どもたちは<花のおばあさん>の絵本を読んで、どんな感想を話したと思う？」と聞くと、「日本はそんなことはしなかった、と言うと思う」と答える子どもがいました。在日朝鮮人学校の子どもたちにも同じように質問しました。「韓国が何か間違っていたからそうしたのだ、と言います」と答える子どもがいました。私は、その子どもたちに「日本の子どもたちはそんなことは一言も言わなかった。日本の子どもたちも君たちと同じような感想を言ったのよ」と話しました。すると子どもたちの目は「本当？」と尋ねるように丸くなります。各国の子どもたちが、互いに信じて友だちになることが大切だと考えました。

## おわりに

---

子どもたちは、好奇心から世の中を知っていき、感じるままに世の中を受け入れていました。率直に自身の感情を表現し、何が正しくて何が間違っているか大人たちよりもっとよく分かっていました。子どもたちは大人たちよりもはるかに強くてしっかりしていたし純粋でした。子どもたちは希望を持っていたし、大人たちは子どもたちに希望を見いだしました。

もしかしたら、全ての問題は大人にあるのかもしれませんが。子どもたちには戦争が起きてはいけないと教えながら、大人たちは絶えず戦争をしています。環境を破壊してはいけなしと言いながら絶えず環境を破壊しています。暴力をふるい、殺人を犯し、弱い人を無視し差別しています。大人たちが作り出すこうした環境で育つほかない子どもたちに楽しくて幸せな本だけを与えることはできないでしょう。大人たちの責任を放棄したまま、子どもたちによい人になりなさいとばかり言えないでしょう。絵本が社会問題を扱う場合、作家がすることのできる話は、大人たちが何を、どのくらい、なぜ、うまくやれないでいるのか、そんなことだけなのかもしれません。そうした真実を、子どもたちに話して理解させることができるならば、子どもたちは自分たちの世の中をもう少し明るくすがすがしく変えていくことができるのではないだろうかと考えます。

長い時間お聞きくださいましてありがとうございました。

(翻訳：大竹聖美氏)